



発行所 地方会ニュース編集事務局
 〒 470-11
 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98
 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教
 室内 電話 (0562) 93-2453
 FAX (0562) 93-3079
 発行責任者 竹内康浩・島 正吾

(題字 皿井 進筆)

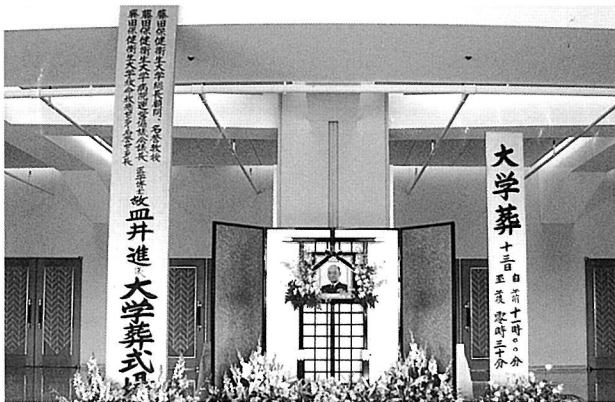
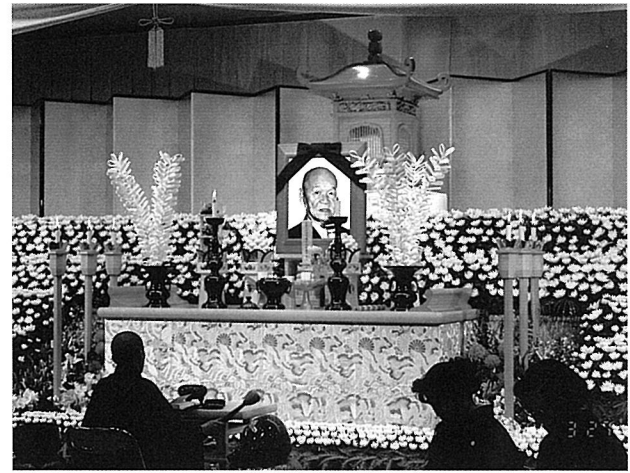
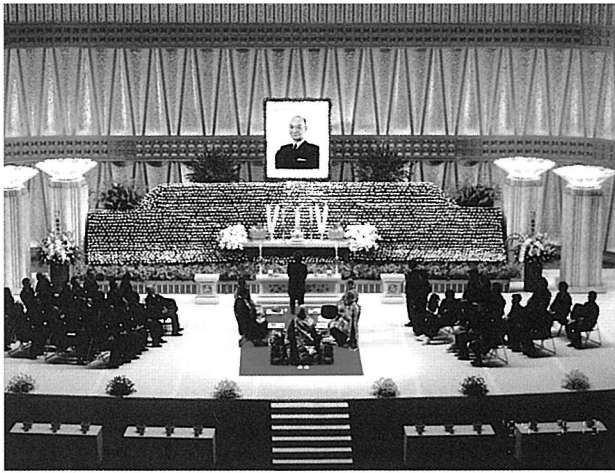
故 皿井 進 先生 特別追悼号



皿井 進 先生ご略歴

明治39年11月27日生

明治39年11月	愛知県名古屋市昭和区鶴舞に生まれる	昭和47年4月	名古屋保健衛生大学医学部教授・学長顧問 (現 藤田保健衛生大学)
昭和6年3月	愛知県立愛知医科大学卒業 (現 名古屋大学医学部)	昭和49年11月	内閣総理大臣藍綬褒賞(労働衛生)受賞
昭和6年9月	愛知県立愛知医科大学第一内科学教室員 (主任教授 勝沼精蔵)	昭和51年2月	名古屋保健衛生大学病院運営協議会議長 (現 藤田保健衛生大学病院)
昭和8年6月	陸軍造幣廠嘱託 熱田工廠勤務	昭和51年10月	労働大臣功労賞(労働衛生)受賞
昭和10年8月	日本レイヨン(株)嘱託岡崎工場勤務	昭和52年4月	大同特殊鋼(株)顧問、大同病院名誉院長 (現 医療法人宏潤会大同病院)
昭和13年9月	大同製鋼(株)大同病院長	昭和54年1月	名古屋保健衛生大学病院救命救急センター長 (現 藤田保健衛生大学病院)
昭和31年12月	日本産業衛生協会東海地方会長 (現 日本産業衛生学会)	昭和56年4月	名古屋保健衛生大学名誉教授
昭和34年10月	労働大臣功績賞(労働衛生)受賞	昭和57年4月	日本衛生学会名誉会員
昭和37年4月	大同工業大学教授	平成4年11月	日本産業衛生学会名誉会員
昭和37年9月	東海産業医療団附属看護婦学校校長	平成4年11月	日本産業衛生学会東海地方会名誉会長
昭和41年10月	名古屋衛生技術短期大学講師 (現 藤田保健衛生大学短期大学)	平成5年2月	藤田保健衛生大学病院名誉救命救急センター長
昭和45年4月	日本産業衛生協会副理事長 (現 日本産業衛生学会)	平成6年3月	藤田保健衛生大学病院運営協議会名誉議長 3日ご逝去



藤田学園大学葬



大同病院葬

惜別の辞

藤田保健衛生大学理事長 総長 藤田 啓 介

平成6年3月3日、血井 進先生の訃報に接し、かねてからひそかに覚悟をしていたとはいえ、先生の密葬に参列して香煙のただよう向こうに先生の遺影を拝見したとき、突然、孤独と寂寥の思いが沸々とこみ上げてきて感慨無量でありました。

思えば、先生との不思議な出会いは奇しき縁と申すほかありません。昭和39年10月10日、39才の私が学校法人藤田学園を創設し、准看護学校を開いて第1回入学式を内輪に挙行了した日でした。当然のことで開校までの日数が押し迫っていて、1学年定員80名のところへ9名の入学生を迎えたときでした。かねがねご高名だけは伺っていましたが、一面識もなかった血井院長先生が飄然とご来場されておられました。式的最中、突然祝辞をいただくことになり、それから、今年まで30年間、陰に陽に学園と私のために様々のご支援をいただいたことは、先日の大学葬のときはむしろ、広く知られるところであります。学長顧問として大学の人事及び運営に積極的に参加されただけでなく、当時、愛知医科大学造りに岸 信介、安部晋太郎代議士とともに、鹿島建設が造りつつあった笹島の住友生命ビルの中に、本学園の名駅前保健センターを開設し、先生はその理事長として経営を軌道に乗せられました。

話せば尽きることのないほどの多くのエピソードがあります。確か先生が24歳から25歳のとき、糖尿病を宣告されてから、享年89歳のご昇天までの約60年間にわたる闘病生活は、食餌療法一筋のようでありました。死因は腎不全と聞かされて、先生の真骨頂を目の当たりにするようでありました。

3月3日以降今日まで、先生の古武士然とした生きざまは、学生時代私が読みふけたユーゴーの「レ・ミゼラブル」の最期に、ヒーロー、偉大なる殉教者、ジャン・バルジャンの無名の墓石に、鉛筆で書かれた4行の詩をしきりに思い出させました。

ここに思い出すままに読んで、先生の御霊前に謹んで捧げます。

かれは眠りたもう その運命げに奇しきものなれど
かれは生きたまえり その天使失いしき
かれの命終わりぬ その死自然にして
昼が去り、夜が来たるごとく

合掌

弔 辞

名古屋大学名誉教授 日比野 進

皿井先生、ここに地上で再び相まみゆることの出来ないあなたへのお別れのことはを、捧げなければならないその深いなげかいと、うらみはいくら申し上げてもつきることはないでしょう。

あなたとは大正13年(1924年)、現在の名大医学部の前身、愛知医大予科に共に入学いたしました。それから本年1994年まで正に70年、われわれの殆ど一生を通しての交遊でありました。

しかしそれは交遊と申しまして、私はあなたに絶えずえられ、激励されてまいった70年でありまして、ここにあらためてあなたの厚い友情と深い恩誼に心から御礼申し上げる次第であります。

あなたは人に対する春風駘蕩、内には何人もうごかし得ない強靱な精神を蔵せられ、まことに誠実な人格者であり、また豊かなアイデアマンであり、更に実に旺盛な実行力の所有者でした。

私共は昭和6年共に愛知医大を卒業し、その後勝沼先生の主宰されていた第1内科において、正に秋霜烈日、日に夜についだきびしくはげしかった切瑛琢磨の時代を、あなたも今なつかしく思い出しませんか。

あなたは昭和12年医学博士、翌13年にはすでに大同製鋼の大同病院の設立に関与し、大同病院の院長に任ぜられておりました。大学卒業後わずか7年目の事であります。

そしてその頃より、あなたはあなたのライフワークとなる産業医学・労働衛生学の研究を前進させて行かれました。当時の日本の産業医学の先覚者、暉峻、勝木、相原諸氏にも師事して、その本流をあなたは継いだのであります。あなたの時代を見極めるするどい先見の明と見識の高さは、到底われわれの及ぶところではありませんでした。

しかしその頃より、東亜の空に戦雲が深くたゞいはじめ、医学なども目前の戦陣医学の中に埋没してゆきました。

戦後日本の復興の流れの中で、産業医学、労働衛生のテーマは社会の澎湃たる要請の下に、あなたの活動、情熱は再び燃え上がり、国内外のこの方面の研究者として、指導者として、また組織のオルガナイザーとして、このジャンルの振興促進ひいては現場の福祉増進に日夜を措かぬ情熱に溢れた活動にあなたは身を挺せられ、その卓越した手腕を発揮されました。また、日本産業衛生協会をはじめその他の国内外の多くの団体の要職をつとめられ、産業医学、労働衛生の新時代のアイデンティティを確立し、この方面の学問の発展、更に若い多くの俊秀をあなたは育てあげられました。尚、一方昭和40年の頃よりあなたは、藤田啓介先生の藤田学園創設及びその運営に関し、藤田先生へあなたは協力を惜しまなかったのであります。藤田学園が今日、藤田理事長・総長の下に内容、外観共に国の内外にその偉容を誇っている姿は、あなたも心ゆかいによるこんでいられることと思えます。

あなたは絵画の鑑賞にも深い造詣があり、野球、相撲、ボクシング等のスポーツにも高い見識をもっておられました。昭和のはじめの頃、わたしにボクシングの魅力を教えてくれたのも、あなたでした。

私の敬愛する皿井先生、いくら話をつづけてもあなたとの話につきるところはないでしょう。続ければ続けるほど、なげかいは深くなるだけのことであります。それにしても本当に長い70年でした。よくその間色々とお世話をさせていただきました。あなたの厚い友情と恩誼にあらためて深く深くお礼申し上げます。

いくらなげいてもわめいても、あなたはもうこちらへ帰ってまいられません。皿井先生、ではお別れということになるのでしょうか。

何卒おやすらかに

お別れのことは

日本産業衛生学会理事長 島 正 吾

故皿井 進先生 私ども日本産業衛生学会会員は、去る三月二十三日岡山での学会総会において、先生のご逝去を悼み、心からご冥福を祈って、黙禱を捧げました。

思えば先生は、この学会の創設者である故鯉沼莚吾先生のあとをうけられ、八十才のお年まで全国で唯一人の現役理事として活躍され、また三十余年間、東海地方会長として私どもをお導き下さいました。先生を失ったいま、私どもはまさに「一つの時代が終わった」ことを痛感して、あらためて先生への愛惜の情と痛恨の思いに涙するものであります。

皿井先生、先生が私どもに示された産業医学に対する情熱と熱い願ひは、及ばずながら私ども学会員一人々の胸の中に受け継いで、先生なきあとひたすらに努力、精進を重ねていくことを誓います。

先生、どうかいつものように、慈父のような温かいまなざしをもって、私どもをお導き下さい。本当にありがとうございました。

どうか安らかに眠り下さい。

皿井先生を送ることは

皿井さんを想う

岐阜大学名誉教授 館 正 知



皿井さんとおつき合いは、私が北海道から岐阜に移ってからであり、以来40年以上になる。公私ともにいろんな思い出がある。ここでは東海地方会とのかかわり合いで想うことを述べる。

昭和30年代の後半から40年代の東海地方会は、大変鼻息が荒かった。みんなが独自の学識と経験と見解を持ち、いわば群雄割拠の時代であった。荒くれどもをおさめるのは、温厚で長老の皿井さんしかいない。ということで、皿井さんがみんなの納得のもとで地方会長に推戴された。暫くの間という暗黙の了解が、結局は20年以上になり、その間に日本産業衛生学会の副理事長にもなった。皿井さんの人柄のせいである。

皿井さんは決して独断専行で地方会をまとめるということではなかった。しかし十分な根まわしのもとで、結局は自分が考えていた方向に、地方会を創り出してきたように思う。辛抱強いあちらこちらへの説得の模様を今でも思い出す。

皿井さんが最も喜ばれたのは、東海地方会の島さんが日本衛生学会の理事長になったことである。関東地方会、近畿地方会のような多人数の地方会ではないが、その活動は日本一との自負が皿井さんにはあったはずである。

島理事長をささえ、日本産業衛生学会の活動を繁栄させることが私たち東海地方会に残された皿井さんの遺言のように思う。

皿井 進先生を偲んで

名古屋市立大学名誉教授 奥 谷 博 俊



生涯を産業医学の発展に尽力された故皿井進先生に、心からお悼み申し上げます。先生は勝沼教授の指導を受け、某紡績工場で産業医をしてられました。その際二硫化炭素による神経障害を研究され、常に臨床家として産業医学に深い関心を持たれたと聞いています。

大同病院長として赴任されてからは、医療診療のほかに大同関連企業等における健康管理を実施されました。まだ、労働法規が制定されていない戦前から労働者の健康の保持増進を目標に、衛生管理の三管理の必要性を指摘され、その実施のため衛生学鯉沼教授と連絡を密にし、衛生管理を実施するため、施設、器機、資料を整備し労働衛生の人材を採用するなどして、産業医学の実践活動を実施されたこの分野の先駆者でありました。

東海地方では鯉沼教授が日本における産業医学の開拓者として活躍されており、皿井先生は臨床家として産業医学の実施活動を展開されていました。

当地方の大学の衛生・公衆衛生学の教室では、産業医学を専攻するものが多く、一方産業医活動も活発で、互に協力して産業医学の向上に励み、東海地方会は「見よ東海を」と称されるようになり、今日では島教授が産衛理事長に選出されています。その基礎は鯉沼、皿井両先生始め諸先輩の努力によるものと思います。

先生は鯉沼教授退官後、産衛副理事長、東海地方会長、愛知労働基準協会衛生部長として、数回の産業医学会総会、全国安全衛生大会を主催され、労働衛生の発展のため多大の貢献をされました。

先生は、真理を探究する真摯な態度、豪放闊達な資性、高潔な人

格、伶俐聡明な識見をもって、こよなく産業医学を愛され、多くの事業の運営に当られました。当時若輩であった私共とは、産業医学という社会医学では必ずしも意見の一致をみないこともあり、その際先生は眼を閉じて静かに想を練っておられたお姿が、眼前に浮んできます。

20数年前某化学工場の火災で、消火に従事した約150名のものが毒性が特に高いガス中毒に罹った大事件が発生しました。その際、先生を事故対策委員長とした協議会が設置され、多くの関係者が事後処置に当り、一人の死亡者も出さずに対処できたことは、私としても忘れることが出来ません。

また、先生は国際ロータリーの会員でありました。ロータリーでは一業一人を原則として、クラブが組織されています。先生の職業分類は「病院」ではなく「産業医学」であり、名古屋南クラブの会長として活躍されました。先生の超我の奉仕の核心は、産業医学の重要性を会員に情報提供されることであつたと推察しています。

高齢化社会を迎え、医療の中での産業医学の位置付けは一層高まっています。労働衛生の法制化は既に完成されており、その理念を尊重し産業保健推進のため行動すべき時であります。先生が実践行動された衛生管理の三管理を実行することが、故人に対する何よりの手向であります。衷心からご冥福をお祈り申し上げます。

皿井 進先生をおくる

日本産業衛生学会前理事長

慶応大学医学部客員教授 近 藤 東 郎



皿井先生の訃報をお聞きした。愚痴を聞いて下さる先輩が、またお一人去っていかれた。心底、淋しいと思う。

日本産業衛生学会の今日の隆盛は、久保田理事長と皿井副理事長が名コンビを組まれた時代に、その基礎が作られたといっても過言でない。この事実をここに明らかにしておくことが、当時の総務理事であった私の義務と考える。

皿井先生は、私の産業医活動の最も良き先達であり、理解者であった。躊躇しがちの私が、理事長就任を決意し、どうやら責任を全うできたのは、皿井先生の強い励ましがあつたからである。いま、皿井先生と私の合作で久保田先生に捧げた弔辞を、そっくりそのまま皿井先生に私が捧げねばならなくなった。

皿井先生 どうか久保田先生、石川先生、田中先生、錫村先生、横山先生他の物故会員の方々と、久しぶりのご歓談をお楽しみ下さるようになら

雛の家 つばみほころぶ桜花

主人なしとて 春な忘れそ

故皿井 進先生を偲んで

愛知医科大学学長 祖 父 江 逸 郎



皿井 進先生は名古屋大学医学部内科学第一講座の大先輩で、今日長年にわたって、私自身何かとご指導、ご支援をいただきました。心から感謝と敬意を表する次第です。

先生は早くから産業職場を中核とした、様々の産業医学事業に興味をもたれ、環境と生体との相互関係について追求され、常にダイナミックで柔軟な考

え方を基盤として大きな足跡を残されました。さらに広い視野から産業医学の発展に寄与されたご業績は偉大であり、国内外からも高く評価されています。

先生は几帳面で真面目な方であり、関連学会や研究会には欠かさずご出席になり、若い研究者の発表に熱心に耳を傾けておられるお姿が今でも目に焼きついております。

先生の鋭いコメントは、参加者に成程と納得のいく感動を与え、教えられるところが大いにありました。

また、心身医学領域にも大変な興味を持っておられ、私と森川先生でお世話させていただいた職場精神衛生研究会や、サイコソマのつどい、心身医学会などにもよくご出席になり、熱心に討論に加わっておられたことが印象的です。職場の人間関係を含めて、ストレスによるメンタルヘルスの重要性を認識され、心身医学領域における心身一如の考え方や、様々な心身症にも深い理解を持っておられました。今日、職場のメンタルヘルスは、産業効率の面からも職場で具体的に推進していく必要が強く叫ばれています。この点先生は先見の明があり、早くからこのことに関心を示され、その推進にも大きく寄与されました。

先生は仕事一筋の人で、晩年もその姿勢をくずさず、体調がすぐれないにも拘らず、人生の最後まで仕事の鬼として初心を貫いてこられた生き方は見事なもので、これこそ本当に生き方の手本そのものです。長寿社会を迎え、生きがい、生き方が強調されていますが、先生が身をもって示されたその過程は実に尊いものであります。

先生のあの温容とエネルギーにはもう接することができません。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

合掌

皿井先生を偲んで

柏木正雄



皿井先生と私の出会いは、昭和24年頃、名大の基礎医学仮校舎の衛生学教室であった。鯉沼教授のもとで大学院特別研究生であった私は、産業衛生協会東海地方会の事務局をさせて頂いていた。地方会長であった鯉沼教授を皿井先生が訪ねて来られ、地方会活動を活

発にやりましょとハッパをかけられたのが始まりで、以来50年おつきあいさせて頂いたことになる。

特に暉峻義等先生の発意で開かれた第1回アジア産業保健会議は、当時の産業医学会の後援もなく、先生独りで苦勞されていた。私はその意気を感じて、東海地方圏内でのお世話は、すべてお引き受けしようと、名古屋駅での迎えから京都に立出するまでの三日間のお世話を、皿井先生と私とで準備したことが先ず想い出される。

会社をまわって寄付金をいただき、見学をお願いする。企業人に対する心づかいを皿井先生に教えて頂いたが、これらは後の産業医としての勤務に大いに役立った。

次には第12回の国際労働衛生会議に初めて海外旅行をした時で、昭和32年のことで、2～3か月の旅行だったが、勿論皿井先生も含めて、50歳を超えた先生方の中で、ただ一人42歳の私が同行させて頂いた。うるさい先生方との旅、皿井先生とはいつも同室で行を共にしたが、この機会がその後の地方会活動への構想をまとめるために大いに役立った。

若気で血気盛んであった私を、温厚にとりなして下さった先生のお姿が思い浮かぶ。現役を退いたら後進に道をゆずるといふ私の信念と、最後までつくされた先生の生き方にはちがいがあって、近年はお会いする機会が少なかったが、皿井先生が亡くなった今となって後悔の念を禁じえない。

ひたすら先生の御冥福を祈ってやまない。

合掌

皿井 進先生を悼む

日本産業衛生学会副理事長

富士ゼロックス(株) 産業医 莊司 榮徳



畏敬する大先輩、常に温顔で接して下さった大先輩を失い、寂寥の感深く、心から哀悼の意を捧げさせて頂く。

憶えば、小生が鉄鋼会社の労働衛生実務に携わりはじめた昭和30年代前半の頃は、教を乞う先輩は少なく、戦前から活躍の皿井

先生は、数少ない灯火の一つであった。

既に先生は、築き上げられた大同病院の院長であったが、産業衛生を重視しておられ、鉄鋼業界でも指導的立場におられた。

先生の教えて脳裏に蘇るのは、『諸外国に比し遅れている予防医学的な面に努力を傾けるべきである。出身は臨床・衛生(基礎)を問わない。要は産業医としての自覚である』との言葉であり、『産業医の使命に徹し、経営者にも労働者にも敬愛され、これをもとに従業員の健康保持増進を図り、生産性の向上に渾身の努力を傾ける人達が先駆者となって道を開くべきである』との言葉である。

鯉沼亦吾先生の後を受けて東海地方会を主宰されたお姿、特に騒音・疾病コスト・精神衛生などの斬新な協議・研究テーマが、後輩に歩むべき方向を示されていた。

昭和63年4月、杖と侍者にたすけられながら、遠路千葉大学石川清文教授のご葬儀にお出になり、『先生のご父君、知福先生は私の恩師でね……』と話して下さった温顔が、また臉に浮かんでくる。

衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げて擲筆する次第である。

故皿井先生と私

愛知県医師会産業医部会 服部 於菟彦



約8年前の昭和61年4月、私は医師会事業としては、当時あまり目立たない産業医部会を担当しました。その数か月後の幹事会の折、先生が私を廊下に呼び出され、小さな声で「労災事故の多発している中小企業の労働衛生は、地域医師会員のこれからの仕事だよ」と、これからの産業医部会の方向を示された。

と、これからの産業医部会の方向を示された。

実はかねてから私も部会を担当後、日本の繁栄の基盤を作りながら、大企業とは異なり、地域に散在し、労災事故が多発する中小企業労働者の健康管理は、地域に密接する医師会員の責務と考え、地域医師会員の産業医活動の支援体制を考えていた。そこでその場で先生に、地域医師会員を活用した中小企業労働者のための産業医学支援体制作りをご相談申し上げた所、先生は目を輝かして力強い励ましの言葉をのべられた。以後私は最終目的である産業保健センター設立へ向って、色々な事業を先生の御指導と部会幹事のご協力を得て実施した。

まず一般医師会には産業医学の普及と喚起を計るべく、瀬戸旭地区での日医「産業医研修会を中心とする産業保健活動モデル事業」、労働省による名古屋地区での「地区労働衛生相談医制度モデル事業」等の実施及び担当地区決定に、又第21回日医認定産業医研修会の年間約60時間の実施に全力を傾注した。

一方医師会員の産業医活動支援体制としての産業保健センター作りとして、県に大規模企業の労働衛生アンケート、及び中小規模企業でのアンケート、そして県下精神科医のメンタルヘルス支援への

アンケート等各調査の後、「県下精神科医による職場におけるメンタルヘルスケア支援体制」を作り、さらに日本産業衛生学会東海地方会による医師会員の産業医支援体制を作った。そして最終的に産業医学が学際的であるため、これらの支援体制を補完する総合的な産業保健センター作りに着手していた時、先生のお骨折りにより労働省労働衛生課野崎和昭氏にご紹介させて頂き、産業保健センター構想を労働省へ説明する機会にめぐまれた。後日その構想が、労働省の産業医のあり方に関する検討会の提言9にまとめられ、その提言を参考に現在の産業保健センターが作られた事も後で知り、日医、労働省、県産業医部会の考え方が一致したためと私は思っている。

先生との出会いから、先生のご趣旨に沿うべく、この8年間、私は何か物の気につかれた様に事業を行い、先生のご逝去の年に最終目的であった産業保健センターの外郭が出来たのも、何かの因縁と考えている。

最後に、この8年間に亘る先生の温かいご指導と、医師会員へのご厚情に深く感謝致します。同時に先生のご冥福を心からお祈りいたします。

永遠の青年 — 皿井 進先生 —

健康管理コンサルタント 飯田 英 男



皿井進先生のお姿を私が強く意識して見たのは、昭和29年10月14日である。この日、第1回全国労働衛生大会（現在の産業安全衛生大会）が東京有楽町の読売ホールで開催された。皿井先生は愛知県代表として、「電気製鋼作業構内における一二の職業病について」

の演題で、工場のガス分析室勤務者の水銀の影響と、ニューマチックハンマー作業の筋骨格系に及ぼす影響を講演された。情熱をこめたお話が印象的であったが、お頭はすでに薄くなっていらした。昭和33年秋、第5回大会が名古屋で開催されたとき、私も先生のご指導を受けつつ大会の運営に参画し、先生を中心にした青年産業医グループが形成されていった。

東海地方のみならず全国の産業医・労働衛生関係者を、いつも若々しくリードされていたが、数年前に先生が、「一つにはとても残念なことがある。それは吉田克巳先生が公害研究会をつくろうと東海地方会理事会で提案されたとき、賛否両論の中で結局見送ってしまったこと。あの時研究会を発足させることが出来たら…」と洩らされた。

日本の人口の高齢化の問題を早くから指摘されて、労働衛生の将来を見据えてみえた。晩年まで名古屋内科医会の先端医学解説一学術の集いにも出席されて、新知識の吸収に努められた。サムエル・ウルマンの詩「青春」にあるように、「……頭を高くあげ希望の波をとらえる限り、80歳であろうと人は青春にして已む」。まさに皿井 進先生は永遠の青年であった。

長い経過のうちに

上野 清 敏

① 宿命か



私は、郷里鹿児島県衛生課に勤務していたが、当時の時代背景の大きな流れから、昭和16年には何等かの内意が、私の中で湧き上がってきた。そして大同製鋼(株)大同病院に入社した。同年11月、大同病院内に「工場衛生部」が設けられた直後に、名古屋大学衛生学教室の佐宗武雄講師、千種杏三先生が大同へこられるようになり、奇しくもこの先生方

と机を並べることになったのである。

かくて、病院長であった皿井先生の下で、衛生を担当して長く仕事を続けたが、このことは私にとって、時代の宿命とも言える経過であった。

② 伊勢湾台風

先に、病床に先生をお見舞いしてから、既に幽明境を異にしてしまったが、思い出すものは多い。そのひとつとして、伊勢湾台風の襲来した日（昭和34.9.26）は、産衛東海地方会総会が三重大学で開催されていた。当時の会長は皿井先生であった。台風一過後、破壊の跡もすぎましい町の中を、皿井先生、館教授、平松先生、小生等の一行は、徒歩で夜10時頃ようやく名古屋の先生宅に辿りついた。病院の被害は惨々ながら、入院患者には異常はなかった等との情報に、ほっとされた皿井先生の姿が今でも忘れられない。しかし、思えばよくもまあ、今日隆盛をきわめる大同病院として蘇ったものである。皿井先生のご冥福を心からお祈りしたい。

皿井 進先生に励まされて

藤田保健衛生大学医学部衛生学教授 大谷 元 彦



私は昭和49年7月に名古屋保健衛生大学（現 藤田保健衛生大学）医学部衛生学教室に、助教授として愛知県がんセンターより移ってきました。

先生は昭和41年10月から名古屋衛生技術短期大学（現 藤田保健衛生大学短期大学）の講師に、同47年4月から名古屋保健衛生大学（現 藤田保健衛生大学）の教授になっておられました。

赴任の挨拶をしますと、人懐っこいこやかな表情で私を迎えていただいたことが印象的でした。学生への授業はほとんど私が引き受けたため、先生は講義はされませんでした。先生とは色々の機会をとらえて熱心に話をされておられました。

先生は同時に学長顧問をされており、さらに昭和51年からは大病院の運営協議会の議長としてご活躍されました。

先生は、2週間に1度、病院の院長副院長会議の司会をされ、病院にこられるたびに必ず教室に来られて、仕事の進行状況を熱心に聞いておられました。先生は人生のすべての場面に情熱をもち、誠実に物事を押し進めることを、自分の体力がつきるまで実行されました。

このような先生の人間的な魅力にひかれて、多くの人が先生の周囲に集まり、あのようなすばらしいお仕事を成し遂げられたことに心から畏敬の念を捧げます。

「健やかな老いへの課題」を心に刻んで

藤田保健衛生大学衛生学部公衆衛生教授 伊藤 宣 則



私にとって先生からのお教えは、つねに深い人生哲学、眞摯な研究姿勢そして労働者の健康対策など検挙に暇がありません。殊に老人の余生など、今日の社会医学に求められる様々な事象についての教訓は、私にとって何ものにもかけがえのないものでした。

今も先生の温和で優しい風貌と、輝くような視線を感じながら、10数年にわたるお言葉を鮮明に思い出します。

ことに折にふれて、先生が指摘された「健やかな老いへの課題」へのテーマは、深く私の肝に銘じております。

先生の御冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

〔座談会〕

故 皿井 進 先生を偲んで

-先生との出会い、交流そして別れ-



井田龍三（岐阜県労働基準協会連合会）
 岩井 淳（全日本労働福祉協会）
 小森義隆（大同産業医学研究所）
 清水善男（三菱電機・静岡）
 森川利彦（三菱電機・名古屋）

井上 俊（名大名誉教授）
 加藤竹男（労働衛生コンサルタント）
 島 正吾（藤田保衛大公衛・司会）
 竹内康浩（名大衛生）
 山田信也（名大名誉教授）



島（司会） 平成6年3月3日、私どもは学会の至宝ともいべき皿井 進先生を失い、あらためてこれまでの30年間にわたる先生の功績の偉大さと、公私にわたって私たちの心に刻まれた教訓をかみしめ、日とともに先生への敬慕の思いがつのこの頃であります。

本日は限られた紙面ですが、先生との出会い、30年にわたるいろいろな交流、そして89才という天寿を全うされるまで、産業衛生活動の振興のために活躍された先生を偲んで、座談会をもちたいと思います。

二酸化炭素中毒を学ぶ



〔井田〕 私は、昭和30年頃、東海地方会の研修会で、二酸化炭素について話したとき、初めて先生が二酸化炭素中毒研究の先駆者であったことを知りました。

先生はすでに昭和11年頃に、日本レーヨンで二酸化炭素中毒の問題を研究され、その成果を『精神神経雑誌』に発表されていました。その後、病理関係の雑誌にも研究成果を発表されており、当時は急性中毒によって二酸化炭素精神病が起きるといわれ、またそういう中毒患者が、多発しているとお聞きしました。その後私は、本格的に二酸化炭素中毒の研究に取り組んだのですが、その最初のきっかけは、先生との出会いにあったと思います。それから先生と私との長いおつき合いが始まりました。

それから先生は、大変に世話好きな方という印象が強かった。当時は国際会議へは誰も出席しなかった時代でしたが、先生は私にマドリードの国際労働衛生会議に出席しないかと呼びかけて下さいました。そして私のために大阪の本社まで行って、交渉をして頂いたことは今でも忘れません。



皿井先生と名大衛生学教室

〔井上〕 先生の大学卒業は昭和6年で、私より12年も先輩です。先生は比較的早い時期に産業現場に出られて、二酸化炭素中毒の仕事をされ、それから大同へ移られました。その当時は、鯉沼莜吾教授（名大衛生）が専ら産業衛生をやって見えたので、是非一緒にやろうということになったと思います。

大同に移られて2年後、大同のなかに衛生部をつくられました。これは今から考えても、非常に先見の明があったと思います。それで名大衛生学教室では先生を全面的にバックアップしようというので、佐宗助教授、千種先生など、若手の錚々たる研究者が率先して、先生の所へ出入りしました。

大同の衛生部は、まるで衛生学教室の実習現場のようでした。しばらくして衛生部のあり方について、会社との間に小さなトラブルが起きました。おそらく先生は間に立たれて困られたと思います。

私は信州大学では、産業衛生をあまりやっていませんでした。そして鯉沼教授の後を受けて衛生学教室に就任しました。その時に思ったことは、産業衛生学の実験・研究というのは、やはり大学でやらなければならない。

しかし、実学としての取り組みは、当然産業現場が中心になろうということでした。

これからはこの両面から産業衛生学を育成すべきだというのが、先生と私の間の結論でした。それからの地方会活動として、学会と産業医活動の2本立てというのは、非常によかったと思っています。

先生は率先して産業現場に出て、次々と新しい事業展開をされた。これは指導者としてたいへん優れた能力であり、その先生を失った今、あらためて先生の卓見のすばらしさに感銘しております。

産業衛生学の基礎研究への取り組み



〔小森〕 私と皿井先生とのおつき合いは昭和43年以降であって、あまり古いおつき合いです。しかし先生と私の出会いは随分古く、私が学徒動員で大同へ行った頃、少し体をこわして、先生の診察をうけて以来、急速に先生と親しくなりました。

この頃に、地域に東海製鉄を母体にした東海産業医療団が新しく作られ、そこに産業衛生研究所を作りたいという皿井構想があった。そして私は先生に薦められて、その所長になりました。

しかし研究所の運営は、現実には甘いものではなく、企業から金も出なくて、構想倒れになってしまった。

先生はその頃から基礎的な研究にも、大きな関心をもっておられ、大同病院内に組織培養の設備を作られたり、私たちにも学会へどんどん発表せよという檄がたえず飛んできました。

温かい包容力と学問に対する厳しい姿勢



〔清水〕 私は皿井先生に親しく教えるを受ける機会にはあまり恵まれませんでしたが、一番印象に残っているのは、先生はどんな時にもいわゆる険しい表情をされたことが無かったということです。

これは本当に人間を大切にするというか、先生の温かい包容力から自然ににじみでてきたものだと思います。

もう一つ思い出すのは、昭和61年に中部労働衛生コンサルタント協議会の自由集会で、先生が産業衛生学会の歴史を工場法時代から丹念に資料を元に講演されたことがありました。

その前年、昭和60年に『ろうさいフォーラム』とかいう雑誌に、皿井先生を交えて農村医学界の若月先生など何人かの先生による、「勤労者のための実践医学」という座談会記事が載りました。

その座談会でどなたかが、産業衛生協会・産業衛生学会というのは、予防一本やりであって臨床医学の部分が多量にも少ないのは問題ではなからうかという発言があった。

そしてそれは事実とは違ふ、誤解であるという記事が翌年『労働の科学』誌の巻頭言に載ったのです。先生はそのことについても詳しくお話をされました。

たしかに我が国で最初に産業衛生協会を作ったのは、大部分が純粹の臨床医だったといえましょう。というのは多くの労働者が日々の労働によって、身体を傷めていく現実を臨床医が見るに忍びず、こういう組織が作られたと聞いています。

そして先生はつねに産業衛生活動は、常に予防と治療の1本化を目指すことが重要であると強調されました。

先生は戦中から戦後の高度経済成長の時代、そしてオイルショックの時代を経て次の時代に移るまでの間、一筋に産業衛生の途を生きられた本当に信念に生き抜いた人だったと感じています。

〔鳥〕 いまの皿井先生のお言葉にあった「はじめは臨床医ばかりだった」という表現は、おそらく昭和初期の東海地方会の顧問が、田村春吉、勝沼精蔵、齊藤 真、岡田清三郎、名倉重雄ほか、名古屋帝国大学の錚々たる臨床教授が名を連ねていたことを言うのでしょうか。

産業医の生みの親としての皿井先生



〔加藤〕 昭和23年に「陶磁器業界における肺結核」を地方会で発表しましたが、その後少し体をこわして、昭和31年に再び日本陶器に入りました。当時の地方会の話題が、ほとんどが職業病ばかりで、私はついていけなかった。学会の懇親会の席で森川先生に、

「なんとか自分たちのような現場の医者も、積極的に取り組んでいける場を作りたい」と話した。そこで新地方会長の皿井先生に相談し、国際会議に出席直前の先生から手紙が来て、「ぜひやってください」と激励された。これが動機になって、昭和32年に愛知県管理医懇談会が生まれました。

昭和34年、この会が提唱して全国産業医懇談会が設置された。先生は「問題が起きたら面倒をみてあげるから、しっかりおやりなさい。」と言われた。それがその後の産業医協議会設立の下敷きになった。

横山恒矢先生、錫村満先生と私は、産業医の御三方と呼ばれていましたが、今では私だけになってしまいました。皿井先生ともお別れした今、ますます歳月の流れのきびしさを実感しています。

それから愛知県医師会との関係も昭和40年7月からはじまり、昭和54年に医師会の中に産業医部会が生まれて、先生が顧問で私が副部長だった。ともかく先生のエネルギーで精神的な若さにはいつもびっくりしていました。

産業医に必要な国際感覚を身につけよ



〔森川〕 私は先生について、強く印象に残っていることが2つあります。1つは、保健衛生大学が生まれる前に、今話が出ました横山、加藤、錫村、出原の各先生と私が集まっていた所へ、藤田啓介先生が来られた。藤田先生からは皆で桶狭間の検査技師の専門

学院で非常勤講師をやってくれないかということでした。

皿井先生からも側面的に「やれやれ」といわれて、結局は私と出原先生だけが引き受けることになった。しかし最初の講義には、わざわざ皿井先生に来て頂きました。

もう1つは、たしか先生がヘルシンキでの国際学会に出席されたから、「これからの産業医は、国際的な感覚を身につけていなければいけない」ということを、盛んに強調されるようになった。

そして東京の本社へ行って、森川を国際学会へ出席させてほしいと説得して頂きました。おかげで、次のウィーンの国際学会に出席できました。今では私自身がしばしば発展途上国へ出かけておりますが、今になってその時の先生のお話が非常に意義深く感じられております。

皿井先生の心のぬくもりを感じながら



〔岩井〕 私は先生との出会いがどこであったか、どうもあまりはつきりしません(笑)。昭和36年頃の三菱重工は、産業衛生に対する管理体制がほとんどできていなかった。三菱病院長は山田勲先生で、労働衛生には比較的熱心でした。

しかし病院自体は全く無関心で、もっぱら診療オンリーでした。山田先生からは「せっかく君が来たんだから、労働衛生をしっかりやってほしい。そのためには大同病院に皿井先生という方がみえるから、ぜひ教えるを請うとよい。」といわれた。考えてみると、それが先生との出会いということになるのでしょうか。

私は学問や仕事の上では、先生とは直接つながりはあまりありませんでした。ただ、いろいろな研究会に出席して感じたのは、労働衛生が今日まで来た流れとといいますか、日本の歴史に非常に造詣が深いということでした。

私は職業病や労働衛生には全く門外漢であり、いつも受身的に、先生からいろいろと学ばせて頂きました。

それから私は、昭和40年に大変な交通事故をしました。その時に先生とは、あまり面識はなかったのですが、ずいぶん気にかけて頂き、病院にも直接お見舞いに来て頂きました。

ついで昭和50年ごろ、私の親と息子が相次いで死亡したとき、先生はこれにもその都度葬儀に参列して頂きました。先生との人間的な交流の中で、先生は非常に人の心の「痛み」とか、「悲しみ」を分かって頂ける方だと思ってきました。

産業医の後継者づくりのために



〔竹内〕 私は、これまで皿井先生から直接教えるような機会はありませんでした。私たちの世代では、鯉沼先生はすでに神話の世界の方でして、皿井先生もやはり同じような感触で接していました。

1960年代は、産業界は経済成長の真っ只中にあり、安保闘争があったりして政治的な緊張も非常に高かった時代です。私たちの身边では大学の民主化や、自治のあり方が問われ、学会活動と産業界との関係もたいへん難しい状況でした。

私たちは、産業衛生というのは、いつも現場に役立つものでないといけないという考えで、教育をされてきました。しかし産業医の先生方と、大学で勉強している私たちとは、必ずしも良い関係にあったとはいえませんでした。

私が入局した時は、すでに先生は地方会長としてかなり高齢であり、まさにおじいさんという感じでした。印象としては地方会等で若い人の研究発表に対し、何かボソボソとコメントされたり、質問されていました。あんなおじいさんが、どうしてそんな細かいことに関心をもつのかを実に不思議に思いました。

今思うと先生は、じつに若々しい頭脳を持ってきて、それが若い人に向っての言葉となっていたんだと思います。先生は決して雄弁ではありませんでしたが、質問内容は適確であり、問題の本質をよくとらえて発言されていました。これは亡くなられるまでずっと続いていました。

先生が大同製鋼を、研究のフィールドとして提供されたり、島先生の大学と共同研究をされていたが、そうした発想法が実に素晴らしい印象を与えていました。

それから先生のご尽力で、たいへん優秀な産業医が東海地方に育っていったということは、すばらしい功績といえますね。しかしその後は、いろいろ難しい時代が続いて、若手の産業医が育たなくなりました。

そういう点で、もう一度皿井先生の努力を見習って、若い産業医がどんどん育ってくるようにしたいものです。

産業現場に生き続ける皿井哲学



〔山田〕 私が最初に先生にお目にかかったのは、「東海地方の産衛を今後どうするか」というテーマで会議が行われた時です。井上先生から、「今日の会議には書記役に出席しなさい」といわれた。会議の中で皿井先生から、「ぜひ、あなたの意見を聞きたい」と言

われた。私は率直に、「現在の東海地方学会は名大衛生学教室の同門会みたいなものだ。これでは産衛は育たない。これからはもっと産業医と大学が協力して、地道に産衛活動を広げていくことが大事ではないか」と言いました。このやりとりが先生と私の最初の出会いです。

それから、私はその頃ベンゾール中毒の研究をやっていました。たまたま地方会で、親父さんが内職でゴム長靴を作って、その横で子供が寝ていた。そうすると、その子供の白血球がものすごく増えるということ、を、「初期の暴露が与える影響」という副題をつけて報告しました。

そうしたら日比野進先生が、「皿井先生、あの人はどこの人ですか」と聞かれた（一同笑）。後で皿井先生から、「どうぞ頑張ってください」と言われて、たいへん嬉しかったことを覚えております。

それからもう少し後になりますが、私が骨髄標本を染めて、ベンゾール中毒の早期診断の材料として説明しました。その時先生は、「血液の標本をきれいに染めるのはなかなか難しい。あなたはどこで習いましたか」、「血液学の木村先生の所です。」「それはよくやりました」と。これが2番目に褒められたことです。

今度は私が先生にかみついた経験です。先程井田先生がおっしゃった岡崎の日本レーヨンで、糸を紡いでいる従業員が、物が黄色く見えるというんです。

様子を聞いてみると、これは二硫化炭素の影響かも知れない。そこで文献を調べたら、皿井先生が研究されていたと分かった。それで先生にその状況を話しました。

先生は黙って聞いておられました。実は、レーヨン工場の二硫化炭素中毒が全国的に問題になっていたのです。私はレーヨン工業協会は大変貴重なデータをもっているのに、なぜそれを実際の中毒予防対策に活かそうとしないか。「先生はもっと頑張ってそういう場面に働きかけて欲しい」といった（一同笑）。

そうしたら、先生は確かにそうだが、問題を本質的に解決するためには、それなりの見通しをもって行動しなければならぬと言われた。後から気付いたことですが、先生は基礎的な学問というか、研究に対しておそらくかなりつよい意欲をもってみえた。しかし現場と研究の二股はかけられない。そして先生は現場に生命をかけたんですね。

もう一つは、小森先生の話にあった産業医学研究所を作ろうという情熱ですね。結局は実現しなかった。その時も井上先生と私の3人で大激論をやりました。私は「先生の夢は叶わない」と断言したんです。その理由は、当時の日本の企業では、かつて八幡製鉄や日本鋼管に研究所が作られた時のような社会情勢ではなかった。

日本の企業は、経済成長には力を入れるが、そういう非生産的にみえる研究施設には一切金は出さない。例えば労研のじん肺の研究を引き込んで三井がじん肺研究所を作るという大風呂敷を広げた。しかし結局その案はつぶれました。

だから、私は今の時代にそういう企画が本当に成功するかどうかは分からないと言った。しかし本音を言えば、私としてもあれは本当に叶えてもらいたい夢でしたね。先生の情熱は、いつも産業医学の中に自分の人生をやらせたいと思ってみえた。

それから昭和33年に静岡で最初の地方会が開かれた時でした。大変寂しい地方会で、私はその時に名大生を地方会に連れて行った。先生は「君たちは若くていいな」と目を細めておられた。

ところが翌年の昭和34年、伊勢湾台風の時にその時の学生たちが大同病院の先生の所へ行って、自分たちも何か協力したいと申し出た。学生たちは、去年一度会ったばかりの先生の所へ行って、自発的に救援活動を1週間もやったんです。先生からは、その学生たちの気持ちと実行力を大変褒めてもらいました。

偉大な存在感と人間性を慕って

〔島〕 私は皿井先生とは、保健衛生大学との関係で深く係ってきました。ある年の地方会で、先生から「新しくできた保健衛生大学にきませんか」とまさに飄々とした話振りで誘われた。結局それがきっかけになって、私は名古屋市大から今の大学へ赴任したのです。

それから先生には大学病院に産業内科というか、産業診療科のようなものを作りたいという夢があった。しかし臨床の標榜診療科としてはそういう科名はありませんし、また私自身も力不足でいつの間にか立ち消えになりました。

先生が70才になられた時でしたか、突然地方会長を辞めるとおっしゃった。ところが皆は本気にせず、1回目はアンコールだといって皆が投票した。その後10年間も皿井時代は続きました。

そしてご承知の通り、この地方には阿久津、山田（勲）先生と皿井先生という御三家があった。その中でも先生の生きざまは他のお二人とは違っていた。阿久津先生は自分自身が経営者の一人として活躍された。山田先生はどうしても病院長の臭いが消えなかった。

皿井先生はそのどちらでもなく、つねに産業医学的な存在感があった。産業医と臨床医を足して2で割ったような質感がそこにあった。

私も皿井先生の後をついで6年間、今は竹内先生に代わりましたが、先生のあの持ち味だけは誰にもだせませんね。

もちろん東海地方会には立派な先生がいっぱいみえた。しかしそういう一騎当千の先生方を一つにまとめられたということが、肝心な所だとも思います。

そして89年間生きておられて、みんなの心にストレートに自分自身を投影するということは、普通の人にはとてもできることはありません。

「だんだんお寂しくなりますが」とよく言いますが、ほんとうに先生の存在感が日を追って濃くなっていくことを実感しますね。

それから個人的には、先生のお宅に何度もお邪魔しました。奥様が非常によくして下さい、一緒に食事を頂いたりしました。

亡くなった奥様は、すごくモダンな方で、先生はすごい愛妻家だった。その奥様が亡くなった時に、病院の廊下で先生の後姿を見て、思わずギョッとしました。皿井先生の姿が影だけになって、存在感が何もないのです。先生にとって奥様を亡くされたことがいかに大きなショックであったか。



パリをこよなく愛されて

〔加藤〕 皿井先生の葬儀の時に、先生が若い時から糖尿病だったと聞いてびっくりしました。なぜかという、生前に先生が好んで食べられたのは天ぷらとカツですからね。先生はアルコールはあまりお飲みにならず、決して大食ではなかった。

ところがこの間、ある座談会で奥さんを失った悪童たちが、『妻を騙して30年』という本を出そうということになった（一同笑）。その時に「先生はそういうことはなかったでしょうね」と言ったら、へへへと笑って「そう思いますか？」とおっしゃった。

この「へへへ」という笑いが私には妙に意味深に感じた。

それから先生は、お子さんがなかった。ですから私の欠点の一つでもある子供や孫の自慢話は先生の前では禁句でした。しかし私たちが先生に気をを使う以上に、先生の方から実に細やかな心づかいがあって、かえって恐縮したことも度々でした。

〔井上〕 先生は子供さんがなかったから、その分だけ私達を可愛がって下さったような気がしますね。

産業衛生に一生を捧げて

〔山田〕 皿井先生は、ものすごく気迫のある人だったと思います。ただ、先生はそれを表面には出しておられなかった。

たとえば、先生が産衛学会の理事長になるかどうかという時、先生は「私が当選すると決まれば当然理事長をやる。しかし副理事長なら絶対受けない」と。やはりこれ位の気迫がなければ、学会の理事長職は務まらないでしょうね。

そういう点では、あの先生は内側に秘めた非常に強靱な意志を持ってみえた。それでこそ、東海地方会長の要職を30余年もやってこられたと思いますね。

〔島〕 先生は89才になって現役のまままで亡くなられた。亡くなる一年位前に一度、肺炎になられてから目に見えて弱ってみえた。それでも車椅子が大嫌いで、ステッキにすがるようにして、会議に出席されていました。亡くなる6か月位前からは、その先生の姿がまさに精神力の凝集みたいにみえましたね。

〔岩井〕 この間の保健衛生大学の葬儀の時に、先生のために日比野先生が（名大名譽教授）が弔辞をお読みになった。

先生は大正13年に大学に入学されているんです。そして卒業は昭和6年で、私などはまだ生まれてもない時代です。89才という年齢の大きさはピンときませんが、私どもとは全く世代が違う所から生きつづけて、しかも亡くなるまで、地方学会、それに産衛の理事会にも必ず出席されていた。

しかも非常によく勉強されていた。ただただ頭がさがる思いで、その偉大さには言葉もありませんね。

石井大同製鋼社長と意気投合して

〔小森〕 皿井先生の先見性についていちばん注目したいことは、病院の中に老人保健施設を作られたことです。あの時は、ずいぶん会社からの反対もあったと聞いていますが、結局最終的には石井社長の一言でできた。当初は病院の経営にとって、かなり負担になったようですが、それを乗り越えて、今では完全に自立できるようにされてしまった。

先生はアイデアが非常に豊富な方でしたから、その他いろいろなことを試みられ、完成してみえますね。

〔島〕 皿井先生はああいふ形で大同という企業の中に入っていった、大変な成果を収められたその辺の事情は如何ですか。

〔小森〕 実は先生は、自分より年上の石井健一郎社長との間にできた人間関係を、最大限に利用されていたようです。ちょっと困ったことがあると、石井社長に直談判をして、自分の考えを説明されていた。

皿井病院長―石井社長という、トップ同士のホットラインを通して、大同製鋼の安全衛生活動が推進されたといっているでしょう。それから大同製鋼が大変な時に、黒字は病院だけであり、石井社長から病院の経営手腕を認められたということも重要です。

〔島〕 しかしそれだけに先生は病院の経営となるとずいぶん厳しかったと聞いています。

〔小森〕 あの先生は、企業病院は黒字でなくてはだめだという信念をもってみえた。会社に対する発言権を強くするためにも、健全な経営的体質を持たねばならないと、考えてみえたようです。

皿井先生にみる産業医としての立場

〔加藤〕 皿井先生は実に偉大な方でしたし、産業医としても申し分のない活躍をされたと思います。

ただし一言だけ感想を述べれば、先生は産業医としてはやっていけないことをやられたと思うんです。どこの企業でも、それなりに企業内管理体制というものをもっています。しかし先生のやり方ではその組織の真ん中を飛び越えて、トップの方へ直接話がいってしまう。

それでは組織の中にいる人が困るんです。少なくとも手順としては、一応体制を通してから、無理解なら最後にはトップと談判するのが通常ですね。

こういう意味のことを先生に直接言ったことがあります。その時先生はニヤニヤ笑って、「加藤先生、あなたは大変良い会社の医者ですね」と言われた（一同笑）。その時にはどういう意味か私には分からなかった。

〔森川〕 皿井先生がトップの石井社長と意気投合して、その中で、産業医が動きやすい条件を作ってくれた。皿井先生の成功は先生の識見と社長・トップの協力の結果だったと思います。この点皿井先生は恵まれていたと言えますね。

〔島〕 阿久津先生と皿井先生の違いは、阿久津先生は自分が重役そのものになって、経営の一環として企業内の産業衛生活動を評価されようとした。

しかし皿井先生は違うんですね。ご自分で重役を動かしながら、企業そのものとは明らかに一線を画してみえた。

〔清水〕 皿井先生のことを果して産業医といっているかどうか。病院長でもあるし、理事長でもあった。私自身は先生を大同特殊鋼の産業医というふうには理解していません。

いつの時にも先生から産業医はかくあるべきだというお話は、なかったような気がします。

〔山田〕 皿井先生の中にあつた産業医という意識は、先生が産業衛生に関わる専門家であり、また実践を積み重ねてきた自身の経験が物を考えるベースになってきたと思います。

ある時、皿井先生と「学問の役に立ち方」という議論をやったことがある。そうしたら先生が三重の吉田君は、本当に優れた学者である。住民に働きかけ、行政に働きかけ、四日市の公害を解決するというすばらしい仕事をやられた。ただ、あれが裁判になったのは、企業側からみればたいへん痛い教訓だった。そして皿井先生は、ある時財界の人を集めて、吉田先生に公害の講義をさせる機会をつくられた。

先生にはそういう発想をされる側面があった。私はそれを聞いて先生は学問・仕事・社会のポイントを頭にいれておいて、機会ある毎に経営者に、それをぶつけていくという気合いがあった。おそらく自分で経営者を説得して、具体的にことを進めていくことに強い確信があったのですね。

〔井上〕 先生はやはり基本的なものの考え方がしっかりされていた。だから外から見ると、なんだか「あいつが医者か」というような見方も一部にはあった。

だけど、私は本当は医者という固定概念で皿井先生をみてはいけないと思うんです。皿井先生をみてきて、これからは弾力性をもった考え方や行動ができるような医者が必要になってくると思いますね。

産業医と臨床医を足して2で割る

〔加藤〕 先生は早くから医師会の中に産業保健活動の実践の場を作ろうとされた。そして愛知県医師会に産業保健委員会が生まれた。この発想の原点には、臨床医は日常診療の中で、特定の職業をもった労働者の病気を診療しなければならない。臨床医には、ぜひとも労働者の職業病予防や、産業保健活動への支援に対して、関心をもって欲しいという考えがあった。

しかし一応の組織はできて、臨床の先生たちは初めは必ずしも協力的ではなかった。今日でこそ理解されるようになって、全国規模で認定産業医制度が定着するまでになった。

しかし本当の意味では理解はなかなか進まなかったが、先生はそういう中で、医師会の先生方を説得されていたんですね。



第5回橘会総会でのご観説

〔小森〕 ご存じのように名古屋という所は、経営者集団といっても、いつも名古屋五社が中心で、その中で企業の安全、衛生と労災問題などを考えられていく。

先生は愛知労働基準協会の副会長、衛生部会長としてこの五社のリーダーとして、非常に地道な活動をされてきました。

皿井先生の壮大なスケールと夢

〔井上〕 私は、先生にはやはりまだ勝沼精蔵先生からの精神が残っているように思います。それから皿井先生には、もう一つは暉峻義等先生の考え方が、一緒になっている。

それだから鯉沼先生が産業衛生協会をやる時には、やはり勝沼さんに相談していたし、勝沼さんも積極的に皿井先生を応援していた。それから先生は、産業界におけるいろいろな人との付き合いのコツを、よく会得しておられた。

あの時代には、愛知医大から昇格した新進気鋭の先生たちが、一丸となって大学づくりをやった。勝沼先生や斎藤先生をはじめ、その時代に活躍した若手の研究者たちのホットな精神が、すべてに生き生きとしていた。

その中で先生は激しい教育を受けられてきた。そういう意味で、皿井先生自身の発想法にしる、企画のたて方にしる、非常にスケールが大きくなったのですね。

あの混沌の中で、新しく何かを生み出すためには、単に能力ばかりでなく、すごいカリスマ性がなかったら何事も成功しなかったでしょうね。その中に勝沼先生があり、皿井先生があったと理解すべきでしょう。

いつも「あっち向いてホイ」では、百年河清を待っても無駄でしょう。皿井先生との別れを自分のものとして、もう一度新しい時代に向かって、産業医学のあり方を考える時期にきていると思います。

〔竹内〕 先日、藤田学園葬で藤田理事長と日比野先生の弔辞を聞いて、初めて知ったことが沢山あるんです。

その時に、藤田学園の創設に当たって、皿井先生がたいへん力になられたことを知りました。それまで抱えてきた皿井先生のイメージに対して、さらに先生のスケールの大きさを肌で感じた思いでした。

〔山田〕 皿井先生は、ご自身の産衛研究所の夢がつぶれて、今度は藤田学園で別の夢を開かせてやろうとされた。それで、今度は島先生に期待をかけられたと思うんです。

先生が藤田学園と関係をもつようになられてからは、今度は発想の転換があって、次の世代にバトンタッチするという考え方に変わっていったのです。そして大同病院では、いつも自分がやらねばという考えがベースにあったが、それが若い人を育てていく方向に伸びていった。

〔小森〕 東海産業医療団では、先生自身が汗を流され、その事業を自分のこととしてやろうとされた。一方藤田学園では今度はそういう変わり方をされたことは見事です。

〔岩井〕 私は三菱に40年近くいて、そのスタートで勝沼先生との出会いがあった。その時勝沼先生は、今までの医学は個人臨床が主体だった。

しかしこれからは集団臨床にすべてをかけるべきだといわれて、随分感銘しました。

この話を皿井先生に話したら、ものすごく感激されましたね。「その通りだ、それこそ勝沼哲学だ」と言われました。

〔清水〕 皿井先生は、やはり静岡あたりではちょっと考えられな

いようなスケールの方ですね。中部圏が必要とした人材が時代の要請とともにそこに生まれたという感じですよ。

〔井田〕 私は化繊協会の研究会委員長をずっとやっていました。しかし企業内の衛生問題はつねに産業医が責任者になるべき苦ですが、実際はそうではなかった。

当時はまだ病院長や診療所長が中心で、大変苦勞をしました。いま先生をあらためてみるとその大きさや実行力には感服するばかりです。

〔島〕 それから忘れてならないのは、東亜合成の爆発事故で、従業員、警察官、消防員など、90余名の入院を要するような中毒患者がでたことです。あの時は皿井先生を中心として、大学、病院をはじめ地域の医療機関が総力をあげて治療に協力したり、中毒発生原因の究明に日夜働いたものです。

先生はまさに一糸乱れず全員の統率をされました。難かしい先生方が一杯いる中で、皿井先生なればこそ、ああいう団結が可能だったんですね。先生自身が疲れをものともせず、随分気合がこもった毎日でした。

そして災害事故自体は幸いにして、最も理想的な解決の方向をとった。しかしきわめて残念なことに、あの時の全記録が何かの手違いで消失してしまいました。皿井先生はあの記録を英文にして世界に紹介しようと考えておられた。今更ながらの繰り言ですが、それが達成できなかったことは、先生に対してお詫びの言葉もありません。

むすびにかえて

〔島〕 予定の時間になりました。まだとても話題はつきません。しかし皿井先生を偲ぶ時、先生という一人の人間が、これだけみんなの心の中に深く関わってみえるということは、おそらく常識では考えられないことだと思います。やはり先生の温かく、また反面厳格なお人柄によるものと考えます。

もし今「皿井哲学」というものがあるならば、一方には勝沼先生から継承された臨床医学的基盤があり、またその対極には暉峻義等先生の流れを引く産業衛生学という基盤があって、この両者がクロスするところに、皿井先生ご自身の存在と意義があると思います。

この座談会が本当に意義のあるものとして、また将来皿井先生を偲ぶかけがえのない記録として残っていくことを心から祈念したいと思います。先生方にどうもありがとうございました。

思い出のアルバム



愛知医科大学時代（22才・右端・白矢印）



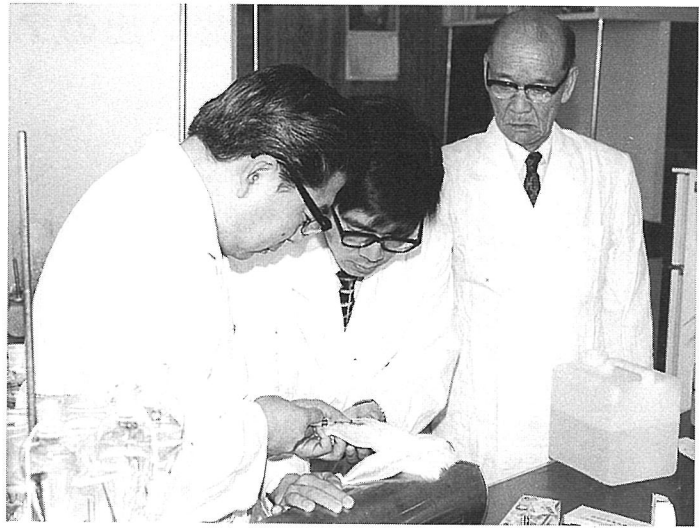
大同病院長に就任（32才）



最愛の奥様と共に（50才）



日本産業衛生学会東海地方会長を勇退 (79才)



藤田保健衛生大学医学部研究室にて (68才)



日本職業アレルギー学会会場から (84才)



八勝館でのロータリー親睦会 (先生74才・奥様68才)



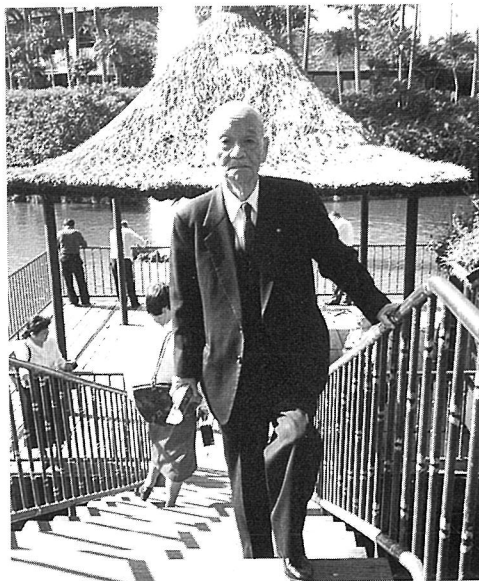
東海産業医療団中央病院時代 (53才)



大同病院の礎石を前にして (80才)



藤田保健衛生大学医学部同窓会へのご出席 (86才)



颯爽と沖縄旅行でのスナップ (87才)



平成4年元旦にみる先生の雙鐙たるお姿 (86才)



謹んで故皿井 進 先生のご冥福をお祈りいたします。

日本産業衛生学会東海地方学会

藤医会（藤田保健衛生大学医学部同窓会）

医療法人 宏潤会大同病院

愛知県医師会会長 加藤順吉郎

(社)愛知県健康管理機関協議会

愛知県安全衛生コンサルタント会

(社)愛知労働基準協会

編集後記

日本産業衛生学会地方会にとって、故皿井先生のご逝去は、まさに晴天の霹靂であった。かねてから私どもは、過去50余年にわたる先生の素晴らしいご業績や、温かい人間性に溢れたエピソードの数々を、何とかして記録に留めておきたいと願ってきた。しかし先生のご他界によって、今はそれもかなわず、その点でも関係者一同はひとしく無念の涙を呑んだことである。

そこで私どもは、この「地方会ニュース」を故皿井先生の特別追悼号として上梓し、せめてもかけがえのない先生の偉大な足跡と、在りし日の懐かしい思い出をお互いに綴ろうとした。

なお「思い出のアルバム」にある貴重な先生のお写真は、皿井家のご好意によるものであり、厚くお礼申し上げます。

(鳥 正吾記)

平成6年7月26日

編集責任者 吉田 勉（聖隷健診センター）

編集委員（五十音順）

井 谷 徹（名市大）	岩 井 淳（全日本労働福祉協会）
加 藤 保 夫（岐阜県産業保健センター）	鎌 田 隆（本田技研浜松）
後 藤 猛（前ヤマハ健康管理センター）	五 藤 雅 博（旭労災病院）
小 森 義 隆（大同病院）	榊 原 久 孝（名大）
柴 田 英 治（名大）	清 水 高 子（清水ヘルスケア事務所）
高 柳 泰 世（本郷眼科）	竹 内 康 浩（名大）
谷 脇 弘 茂（藤田保衛大）	中 川 祐 子（東芝三重）
松 本 忠 雄（名市大）	山 田 琢 之（愛知医大産業保健科学センター）
鳥 正 吾（臨時・藤田保衛大）	